

THE  
SUN  
SHINE  
SHOW





AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1990

ANDERSON  
BRADFORD  
WICKMAN  
HOWE

アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ 日本公演

3/1 ●東京 **NHKホール**

主催●東京放送

3/2 ●東京 **NHKホール**

主催●東京放送

3/4 ●東京 **NHKホール**

主催●東京放送

3/5 ●大阪 **フェスティバルホール**

主催●エフエム大阪

3/7 ●横浜 **横浜文化体育館**

主催●ウドー横浜/**TVKテレビ** 後援●**FM横浜**

3/8 ●東京 **サンプラザホール**

主催●東京放送

招聘●ウドー音楽事務所

協力●BMGビクター

訳・内田久美子  
印刷・LD企画





# 最強のイエス・サウンドの再現！ ABWH

大森庸雄

TSUNEO O'MORI

前回、88年4月、イエスとして来日したジョン・アンダーソンは、彼の長いキャリアの中の大きな思い出として『危機』(CLOSE TO THE EDGE)を完成させた時だと言っていた。1972年9月に発表されたイエスの5枚目のアルバム。このアルバムとその前の71年に発表した『こわれもの』(FRAGILE)こそが、イエスの長い歴史の中で最強のメンバーといえるジョン・アンダーソン、スティーヴ・ハウ、リック・ウェイクマン、クリス・スクワイア、ビル・ブラッフォードから作られている。その5分の4が、90年代に動き出した。

ジョン・アンダーソン：ランカシャー、アクリントンの生まれ。ダン・ヘッジスの書いたイエスのバイオグラフィーによれば、14才で学校を卒業した子供達は、残りの人生をほとんど、工場の門をくぐることで過ごすそんな町だという。煉瓦を港まで運ぶトラックの運転手をしていたジョン・アンダーソンは、リヴァプールの港町で、あのビートルズも出演していたキャバーンというクラブに顔を出すようになり、音楽にひかれるようになったという。最初に入ったグループは、トニーというジョンの兄の組んでいたウォーリアーズというグループだった。ジョンはウォーリアーズのヴォーカリストが抜けた後に加わり、兄が結婚をしやめた後もそのままバンドをひきついだ。

ソロ・レコードを出したり、いくつかのバンドを経験した後、シンにいたクリス・スクワイアと知り合い、サイケデリック・バンド、メイベル・グリーアズ・トイショップを結成。ビル・ブラッフォード：軍人の息子として

生まれ、恵まれた家庭生活を送っていた。小さい頃ジャズにひかれ、アート・ブレーキーに憧れ、ドラムスを始めたが、15才で、ジンジャー・ベイカーを見て、新しいショックを受ける。それはジャズのスピリットを持ち、ハードなロックでもあった。1968年1月、リーズ大学を続ける考えを変え、ミュージシャンになることを決意、サヴォイ・ブラウンのオーディションを受ける。しかし数回のライブですぐに脱退、ペーパー・ブリッツを経て、メイベル・グリーアズ・トイショップに加わる。そしてトニー・ケイに続き、一時、トイショップにいた、ピーター・バンクスを再びメンバーに迎えた彼等は、バンド名をイエスとし68年8月、初のライブを行ったのであった。

リック・ウェイクマン：ウェスト・ロンドンの生まれ。その昔、ダンス・バンドにいたというウェイクマン家には、ピアノがあり、幼いリックは、父さんのようにピアノを弾きたい、と思っていた。そして7才の時、先生につきクラシック・ピアノのレッスンを始め、10才にして早くも音楽祭で優勝するという栄誉も受けている。14才で組んだアトランティック・ブルースを皮切りにバンドに加入しながら、ピアノのレッスンも続けた。さらにトニー・ヴィスコンティ、デニー・コーデルというプロデューサーと知り合ったことから、レコーディングのセッション・ミュージシャンとしても活動、デヴィッド・ボウイからブラック・サバスまでそのセッションの数は、2000にものぼるといわれている。ストローブスのレコーディングにつきあったことから、

デイヴ・カズンズに誘われ、バンドに加入。しかし翌年、早くも音楽的相違が生じた。そこにトニー・ケイの後釜を探していたクリス・スクワイアの誘いで、1971年、イエスに加入。

スティーヴ・ハウ：ロンドンの生まれ。幼い時から、両親のレコード・コレクションからレス・ポール&メリー・フォード、チェット・アトキンス、デュアン・エディなどのギタリストのレコードを好んで聞いていた。また兄のフィルがクラリネットを演奏していたことから、ジャズにも影響される。父親に買ってもらったアコースティック・ギターを手に入れてからは、ますます頭の中は、ギターでいっぱいになった。スクール・バンドから、いくつかのバンドを経て、68年ボーダストに加入。脱退後、1日だけ、キース・エマーソンのナイスにいたこともあるが、イエスのオーディションを受け、迎えられる。

4人の強者たちは、ここに再び集結した。1988年、ロンドンでジョン・アンダーソンはスティーヴ・ハウと再会、一気にビル・ブラッフォード、リック・ウェイクマンのABWHのスーパーグループ結成が話し合わせ、翌89年構想は、現実となり、さらにトニー・レヴィン(ベース)、ジュリアン・コルベック(キーボード)、ミルトン・マクドナルド(リズム・ギター)というメンバーをサイドに従えるという強力なラインアップで活動を始めたのである。

最強のイエス・サウンドの再現に加え70年代から80年代、それぞれの道を歩んでいた4人がその後の多彩なキャリアの積み重ねを経てのプレイ、どんな華麗なテクニックを披露してくれるか、ステージからは目を一時も離せないだろう。





Anderson, Bruford, Wakeman, Howe – “An Evening of ‘Yes’ Music, Plus . . .”

29TH JULY	MUD ISLAND, MEMPHIS
30TH JULY	CHASTAIN PARK, ATLANTA
1ST AUGUST	COLISEUM, HAMPTON
2ND AUGUST	CITY ISLAND, HARRISBURG, PHILADELPHIA
3RD AUGUST	SPECTRUM, PHILADELPHIA
4TH AUGUST	NASSAN COLISEUM
5TH AUGUST	MERRIWEATHER POST, COLUMBIA
6TH AUGUST	GREATWOODS, MANSFIELD
8TH AUGUST	RIVERFRONT PARK, MANCHESTER
9TH AUGUST	ORANGE COUNTY FAIRGROUNDS, MIDDLETOWN
10TH AUGUST	JONES BEACH, WANTAUGH
11TH AUGUST	CIVIC CENTRE, HARTFORD
12TH AUGUST	SEASHORE P.A.C., OLD ORCHARD BEACH
13TH AUGUST	GARDEN STATE ARTS, HOLMDEL
14TH AUGUST	RAIN DATE, JONES BEACH
15TH AUGUST	PALUMBO CENTER, PITTSBURGH
16TH AUGUST	BLOSSOM MUSIC, CUYAHOGA FALLS
17TH AUGUST	CAYUAGA COUNTY FAIRGROUNDS, WEEDSPORT
18TH AUGUST	DARIEN LAKE, DARIEN
19TH AUGUST	PINE KNOB, CLARKSTON
20TH AUGUST	POPLAR CREEK, HOFFMAN ESTATES
22ND AUGUST	CNE, TORONTO
23RD AUGUST	CIVIC CENTER, OTTAWA
24TH AUGUST	FORUM, MONTREAL
25TH AUGUST	AGORA, QUEBEC CITY
28TH AUGUST	SUMMIT, HOUSTON
29TH AUGUST	STARPLEX, DALLAS
31ST AUGUST	SANDSTONE, KANSAS CITY
1ST SEPTEMBER	RED ROCKS, DENVER
2ND SEPTEMBER	PARKWEST, SALT LAKE CITY
4TH SEPTEMBER	OPEN AIR THEATER, SAN DIEGO
5TH SEPTEMBER	PACIFIC AMPHITHEATER, COSTA MESA
6TH SEPTEMBER	GREEK THEATER, LOS ANGELES
7TH SEPTEMBER	GREEK THEATER, LOS ANGELES
8TH SEPTEMBER	COUNTY BOWL, SANTA BARBARA
9TH SEPTEMBER	SHORELINE AMPHITHEATER, MOUNTAINVIEW
10TH SEPTEMBER	CALIFORNIA EXPO AMPHITHEATER, SACRAMENTO
20TH OCTOBER	WHITLEY BAY ICE RINK
21ST OCTOBER	EDINBURGH PLAYHOUSE
22ND OCTOBER	EDINBURGH PLAYHOUSE
24TH OCTOBER	BIRMINGHAM N.E.C.
25TH OCTOBER	BIRMINGHAM N.E.C.
28TH OCTOBER	WEMBLEY ARENA
29TH OCTOBER	WEMBLEY ARENA
2ND NOVEMBER	BRUSSELS, FOREST NATIONAL
3RD NOVEMBER	ROTTERDAM
5TH NOVEMBER	HAMBURG
6TH NOVEMBER	COPENHAGEN, FALKONER
8TH NOVEMBER	STOCKHOLM, ISSTADION
9TH NOVEMBER	OSLO, DRAMMENS HALLE
11TH NOVEMBER	COLOGNE, SPOR THALLE
12TH NOVEMBER	KASSEL, EISSPORTHALLE
13TH NOVEMBER	MUNICH, SEDLMAYRHALLE
14TH NOVEMBER	STUTTGART, SCHLEYERHALLE
16TH NOVEMBER	FRANKFURT, FESTHALLE
17TH NOVEMBER	WUERZBERG, CARL-DIEM-HALLE
18TH NOVEMBER	BASEL, ST. JAKOBS HALLE
19TH NOVEMBER	PARIS, BERCY
20TH NOVEMBER	TURIN, PALASPORT
21ST NOVEMBER	MILAN, PALATRUSSARDI
23RD NOVEMBER	ROME, PALAEUR
24TH NOVEMBER	MODENA, PALASPORT
25TH NOVEMBER	GRENOBLE, PALAIS DES SPORTS
26TH NOVEMBER	MONTPELIER, ZENITH
27TH NOVEMBER	TOULOUSE, PALAIS DES SPORTS
29TH NOVEMBER	BARCELONA, SPORTS PALACE
30TH NOVEMBER	MADRID, SPORTS PALACE





MANAGEMENT: SUNARTS MUSIC LTD.  
 BRIAN LANE, PETE SMITH, JOSH WARNER

STAGE MANAGER: RICK GRAHAM

KEYBOARD TECHNICIANS: STUART SAWNEY, CHRIS MACLEOD

DRUM TECHNICIAN: CHRIS RANSON

GUITAR TECHNICIAN: P. J. DEACY

CONCERT SOUND: TONY BLANC

MONITOR SOUND: BART ADAMS

SOUND CONSULTANT: ROY CLAIR

SOUND SYSTEM: CLAIR BROTHERS AUDIO

LIGHTING DIRECTOR: MIKE COOPER

LIGHTING SYSTEM: SAMUELSONS, JOHN COPPEN

BICYCLES: BIG 1

USA PRODUCTION & RIGGER: CANNONDALE, TOM ARMSTRONG

ASSISTANT TOUR MANAGERS: WARREN UMPHRESS

TOUR MANAGER: PAUL SILVEIRA, FERDY HAMILTON

LEGAL: PETE SMITH

ACCOUNTS: BELDOCK LEVINE HOFFMAN, ELLIOT HOFFMAN, PETER MATORIN

E.G. MANAGEMENT: ENTCO 2 INC., CATHY CLEVELAND

FOR BILL BRUFORD: STAINTON & SHAFTO, MARTIN STAINTON, TARIK BUSAIDY

IMMIGRATION: SIMLERS, JOHN GOLDRING

BOOKING: MARK FENWICK, CHRIS KETTLE

HOWARD KUSHNER

PREMIER TALENT, FRANK BARSALONA, BARBARA SKYDEL,  
 JANE GERAGHTY

CARNETS: THE AGENCY, NEIL WARNOCK

TRUCKS & BUSES: DENNY BALL

CUSTOM STAGING: REDBURN TRANSFER, CHRIS REDBURN

KORG KEYBOARDS: EGOTRIOS, JIM BODENHEIMER,

YAMAHA INSTRUMENTS: BERRYHURST, SAUL LEVY

CELESTION MONITORS: TAIT TOWERS, MICHAEL TAIT

ROLAND INSTRUMENTS: ROGER DEAN, MARTYN DEAN

ST. LOUIS MUSIC: MIKE KOVINS, BEN DOWLING

FENDER GUITARS: KEITH ALLEN

BILL BRUFORD PLAYS SIMMONS SDX ELECTRONIC DRUMS, TAMA ACOUSTIC DRUMS,  
 AND PAISTE METALS

STEVE HOWE THANKS GIBSON AND MARTIN GUITARS

MANAGEMENT ASSISTANTS: DIANE GILMOUR, CARLA BROWN

CONTINENTAL AIRLINES: TONY ROBINSON, KEVIN BELL, AMI

SUPPLIERS: JOHN HENRY ENTERPRISES, PROJECT MUSIC

PROGRAMME COMPILED BY: ROGER DEAN, PETE SMITH, SARAH ELLIOT

DESIGN AND LAYOUT BY: ROGER DEAN, MAGNETIC STORM LTD.

GRAPHICS AND PAINTINGS BY: ROGER DEAN © 1989

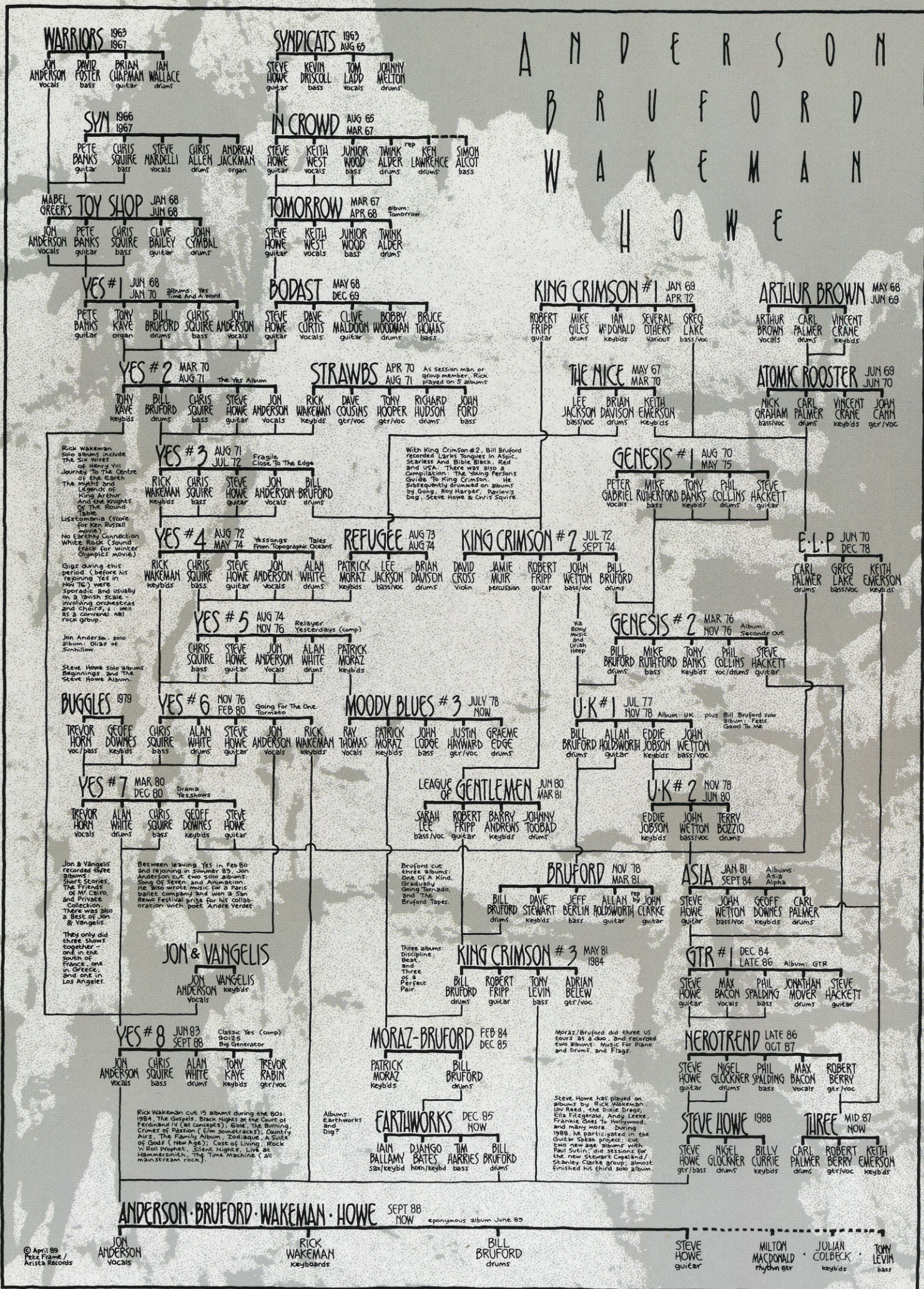
PHOTOGRAPHS: TONY MAY, MALCOLM HEYWOOD, MICHAEL PUTNAM,  
 MICHAEL SMALLCOMBE

MERCHANDISING, COLOUR REPRO, PRINTING CREDITS AS PER BROCKUM ADVICE

Our thanks to Douglas Gottlieb and Yes Magazine.  
 For Fan Club Magazine info, write to Douglas and Glenn Gottlieb,  
 12 Chelsea Pl., Dix Hills, N.Y. 11746-5414.







© April 89  
 Pete Frame /  
 Arista Records



# ANDERSON BRITONS WINKMAN HOWE

## THE GROUP

「消え去れ、絶えず猛威をふるう  
パワープレイ・マシンよ。  
我々の真の姿を映し  
世界に対する見方を映す窓を  
破るであろう者たちのために  
我々の音楽的結束を断とうとするおまえ。」

私は文字どおり、おまえの手から逃れたのだ」

1988年夏、ジョン・アンダーソンがハイドラ島で書いた多くの曲の中のひとつ(その一節)である。昨年、当初の予定以上の期間ギリシャに滞在したことにより、アンダーソンは事実上キャリアの転換点を迎えたといえるだろう。彼はその間に、前進するためには(音楽的な意味でも感情的な意味でも)ロサンゼルスに戻るべきではないという思いを次第に強くした。「あそこで3枚のアルバムを作ってみて、僕らの住む世界に対する見方が完全に変わったんだ」

ロンドンに戻ると、アンダーソンはスティーヴ・ハウ、ビル・ブラッフォード、そしてリック・ウェイクマンに連絡をとった——多くの人々が今もベスト・ラインナップと見なす、かつてのイエスの中核だ。「もう一度このメンバーでバンドを組めば、僕らの音楽とアイデアが僕らを真の運命へ導いてくれるのじゃないかと思った。’70年代にみんなで追いはじめた音楽上の夢が、そこかしこでまた姿を現わすだろう。なんの疑問も抱かず、これだと思ったよ。長年ずっと離ればなれになっていたが、新しいエネルギーの波が押し寄せるのを感じたんだ。『こわれもの』『危機』といった、あの時代の僕らの音楽にそれを感じたのと同じようにね。だから……再結成するしかなかったのさ!」

## ONWARDS & UPWARDS

アンダーソンとの再会にあたり、スティーヴ・ハウが彼に聞かせた最初の曲は、なんともその場にふさわしく、後に“ロング・ロスト・ブラザー・オブ・マイン”となる作品のコーラス部分だった。さまざまな曲やアイデアが次々と生み出されるにつれて、ジグソー・パズルのピースが少しずつはまるべきところにはまっていく。

このプロジェクトに大乗り気なのは、ビル・ブラッフォードも同様だった。「いろんなアイデアを話しあいながら、ビルがコンピュータライズされた新式のキットを使って、僕らの考えている音楽をふくらませていった。そのサウンドと叫ぶたら驚異的だったよ」。また、このグループが音楽的にも精神的にもきちんとやっていくつもりなら、ベーシストとしてトニー・レヴィンを加えるべきだ、と提案したのもブラッフォードである。





リック・ウェイクマンの穏やかで誠実そうな少年っぽい見かけの裏には、桁外れの才能が潜んでいる。「彼には爆発的なパワーがある。何気なくプレイしているけれど、モダン・シンフォニック・ロックの世界で彼にかなう者はいないよ」。ウェイクマンもこのグループの可能性を確信し、再スタートを心待ちにしていた。

ジョンはまず、目新しい特別な場所にメンバーを集めて音楽を練りあげようと考えた。そこで彼は次の日曜に早速パリへ飛び、適当なスタジオを物色する。翌日、フレット城に5週間逗留の予約が入れられ、音楽的なアイデアがセーヌ河の流れのようにほとぼしりはじめた。

スティーヴとリック、ビルが到着すると、彼らは共に曲作りに取りかかり、さらにそれに磨きをかける——昔どおりの息の合ったコンビネーションが、古城の中で甦った。なにより重要なのは、彼らが曲の長さや音楽スタイルになんら基準を設けなかったことだ。その結果、グループがパリでつくりあげたのは、“Teakbois”“オーダー・オブ・ザ・ユニバース”など、多様な感覚やスタイルを持つ、演奏時間にして1時間を上回る作品群だった。面白いことに、一旦マテリアルが出揃うと、曲順(“テーマ”から“レッツ・プリテンド”まで)はいつのまにか自然に決まっていたという。

そして舞台はカリビンのモンセラット島へ。クリスマス前にコンティネタル航空機でマイアミへ向かったジョンは、ビルに言われたとおり、ベーシストのトニー・レヴィンに参加を要請する。3週間後、トニーはアンティグアからアイランド・タクシーでモンセラットへ駆けつけ、ビルと共にマスターテイクを録音。さらに6週間後、グループがすべてのレコーディングを終えると、今度はベアズヴィル・スタジオに場所を移し、スティーヴ・トンプソンとマイク・バービエロがジョンの助けを借りてアルバムの最終ミックスを行なうことになった。10日間にわたるハードなスタジオ・ワークを経て、冷込みの厳しい3月のある金曜日、マンハッタンにあるアリス・レコードのロイ・ロットとトム・エニスにベアズヴィルを訪れ、完成したばかりのアルバムを試聴する。二人はすばらしいニュースを携えてアリス・スタへ戻り、グループを大いに喜ばせた。そしてまもなく、彼らのファンや忠実なオーディエンスも、ラジオやコンサートで彼らの音楽に接し、その喜びを分かちあうことになるのだった。

クリエイティブな面において、まだはめ込まれていないジグソー・パズルの最後の一片があった。「音楽的に見て、僕らの曲はステージ・ソングだといつも思っている。ショウで演奏するのにこそ適しているよね。となると、アルバム・カバーからステージ・セットに至るまでの視覚面で僕らの夢を現実に行ける人物はひとりしかいない」。そしてロジャー・ディーンが、このグループに関するデザインを全面的に担当することに同意し、偉大な協力体制が再び整えられた。かつてイエスの大半のアルバムのジャケットを飾った空想的なイラストレーションで有名なディーンは、最近スペインからニューヨークのアリス・スタ本社へ出向き、ニュー・アルバムのアート・デザインを刷り込んだ5,000枚のポスターに署名するというマラソン・サイン・セッションを行ない、15時間ぶっ続けにサインをして、スペインへ帰った。前回彼が自分の作品にサインをしたときは、その作品(『海洋地形学の物語』)が56,000ドルで売れたということだ。現在は彼の弟のマーティンが、ロジャーの作品をもとにしてグループのステージの美術デザインをしている。

スティーヴ・ハウは、昨年ジョン・アンダーソンと話をしていたころ尋ねた、「僕たちはいつ本当の“グループ”になるんだろう?」。ジョンの答えはこうだった、「みんなでステージに立つときだよ」。

彼らの音楽をどう呼ぼうと——イエス・ミュージックだとか、ナウ・ミュージックだとか、その他もろもろ——それは問題ではない。アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、そしてハウは、音と視覚と曲から成る現代のオーケストラ・パフォーマンスを実現しようという構想に自信を持って取り組んでいるのだ。

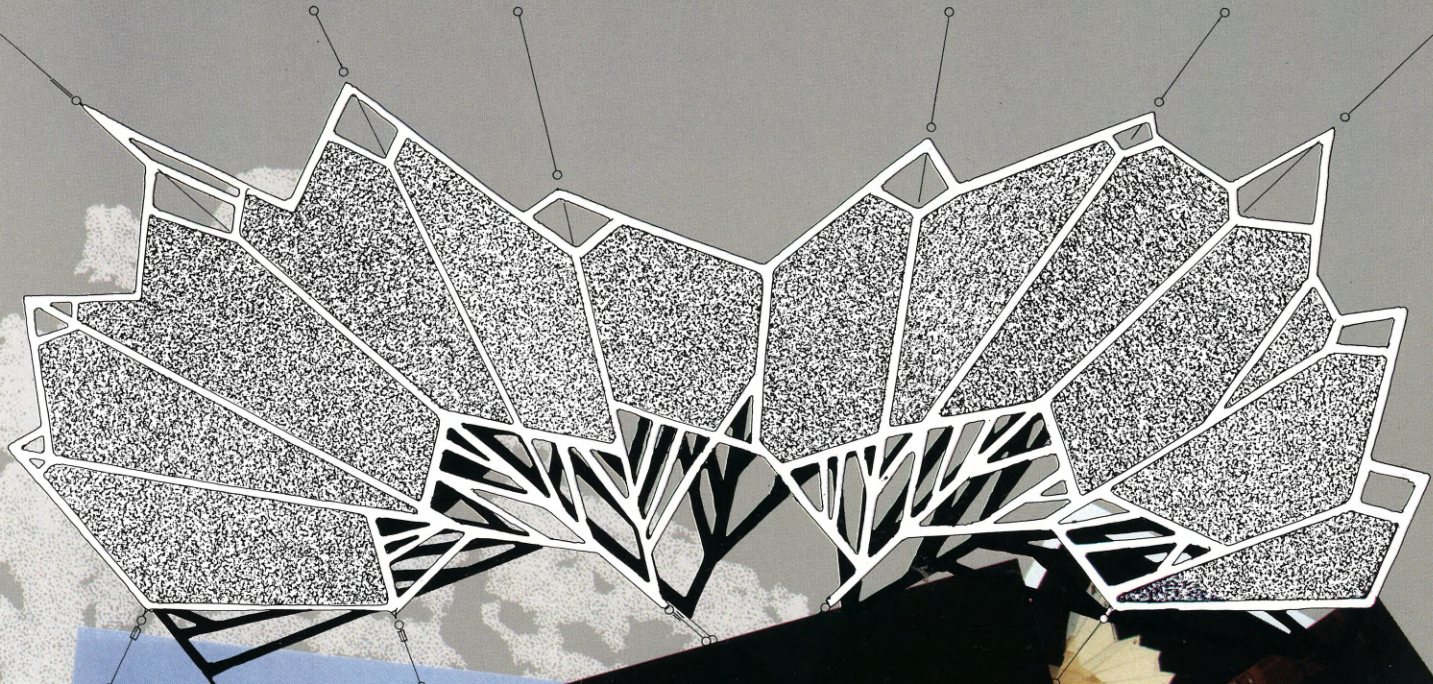
## EVER FORWARD - THE ALBUM - AND SHOWS!

アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ (ABWH) は、5月からワールド・ツアーのリハーサルに入った。〈AN EVENING OF YES MUSIC, PLUS〉と銘打たれたこのツアーは、7月29日のテネシー州メンフィス公演を皮切りに、アメリカ、カナダ、ヨーロッパをまわっている。

ステージ・セットと美術デザインは、兄のロジャーと密に仕事をしているマーティン・ディーンが、ニュー・アルバムの収録曲とアートワークにヒントを得て手がけたもので、ステージは躍動感あふれる音楽と見事にマッチした特別な空間となる。ロジャーもマーティンも、このグループと密接に関わることによって最高のデザインを生み出したのである。

「ギリシャに滞在したこと、それにリックとビル、スティーヴとの音楽的な親交を暖めなおしたことで、また一緒に活動するのは僕らの“バースライト”(生まれつき持っている権利)だと確信した。これが僕らの音楽なんだ」





Hope all is well? Hydra  
Hydra is really one special  
place, it hasn't changed  
in a thousand years  
but it seems to be  
changing in  
lots of Love  
John  
August 88

Well Brian it looks  
good on paper  
Lets get on with  
it  
John



\* we must record on this Island  
it looks so perfect!!  
Don



I seem to miss  
music that I haven't heard  
yet, anyway I'm off to see  
Vangelis in Greece  
I'm ready for a change  
I must remember  
to remember  
to forget!!



HOTEL de la PLACE du LOUVRE  
21 rue des Petites Saules-Carnot P. Montmartre 75001 Paris  
Telephone (1) 42.33.78 66 Telex 1011 21.1407 P  
Must call Brian for arrival  
Be ready for release  
Paris and Germany  
All is going great in the 50716

Rich is really into  
this project  
you see him in London  
Sept 10th  
Take care  
John



Tony Levin  
will be ideal for  
BASS player he really is!  
in unique and a  
great guy  
see you in New York  
John



Amazed  
How Bill has  
developed his  
computer  
Drums  
He's suggested  
Tony Levin  
on BASS  
As all  
Happening













## JON ANDERSON

'70年代、'80年代にイエスの推進力として作用したジョン・アンダーソンの効果的な楽観主義は、'90年代に突入しようとする今、《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》にも深く浸透している。彼の独特なソングライティングと聞き間違えようのないヴォーカルは、この強力な新しい音楽ユニットにおいてもっとも重要な要素と断言していい。ジョンの基盤は、なによりもアーティストとしての真摯な姿勢と音楽に対する誠実さにある。ABWHの音楽は、ジョンのキャリアの中でも最高に活動的でクリエイティブな一時期を画するものだ。メインストリームに飛び込むことを嫌うジョンは、常に音楽的な視野を広げようと努力している。

曲作りとパフォーマンスのほか、ジョンはクリス・キムジィと共同でこのプロジェクトのレコード・プロデューサーをも務め、スティーヴ・トンプソンとマイク・バービエロを起用した最終ミックスの段階に至るまで、独自の感覚でオリジナル・サウンドを求めつつ音楽面の指揮に当たった。現代の録音技術に大きな関心を寄せるジョンは、これまで常にテクノロジーを先駆けてきた。ステージ・ショーに関しても、ロジャー&マーティン・ディーンと徹底した共同作業を進め、彼のアイデアから生まれたイメージや視覚効果がショーのすばらしさに大きく貢献している。音楽は正に、ジョンという名職人によって仕立てられたオーダーメイドだ。

スタジオやステージを離れたジョンの素顔は、美しい愛妻ジェニーと、デボラ、デイミアン、ジェイドという子供たちを大事にする家庭人である。家庭こそは熱意とやる気の源であり、彼はそこからアイデアを引き出すのだ。「ABWHでは、メンバー全員が当初のアイデア、計画を実現させたいと願っているし、その計画に向かって突き進んでいる」。どこまでも意欲的なジョンは、最近ヴァンゲリスとのニューアルバム『ジョン&ヴァンゲリス』をローマで完成させたほか、《モダン・シアター》のための音楽プロジェクトにも着手。また、世界各地の土着民族や、真のアイデンティティ確立のために闘うあらゆる民族団体を支援することも、彼の大きな目的のひとつであり、その意図は新曲“バースライト”にはっきりと読み取れる。

ジョンにとって《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》の目的は、一定のルールや形式に捉われず、純粹にすばらしい音楽をつくることだ。彼は言う、「僕らはプレイしたいんだ。ステージに立てば、それはもうすばらしいイベントであり、音楽を真心で演奏することができる……」。





## BILL BRUFORD

ビル・ブラッフォードはジャズを聞いて育った。'60年代にはアマチュア・ドラマーとして活動し、ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラのルー・ポコックに手ほどきを受けて、1968年にプロの道へ。いわゆるブリティッシュ・アート・ロック・ムーヴメントの先陣に立ち、1968~74年にはイエスおよびキング・クリムゾンに在籍して世界じゅうをツアー。その後数年は、ゴング、ナショナル・ヘルス、ジェネシス、UK といったバンドを転々とするが、自作の曲でやっていけるという自信を深めて自らのバンド、ブラッフォードを結成し、1978~80年の間に4枚のアルバムを発表した。

しかし、彼がエレクトロニクスの使用によってパーカッションのメロディックな面を開拓しはじめたのは、再編されたキング・クリムゾンに籍を置いた1980~84年のことだ。続く2年間はバトリック・モラーツと組んで、アコースティック・ピアノとドラムスのインプロヴィゼーションから成るアルバム2枚を制作。1986年にはジャンゴ・ベイツ、イアン・バラミーと共に、現在も活躍中のエレクトロ・アコースティック・ジャズ・グループ、アースワークスを結成し、ジャズの分野に移行したとはいえ、引き続きドラム・セットを用いてのメロディ・ワークに取り組んでいる。アースワークスは1986~87年にファースト・アルバムを録音、1989年春にはセカンド・アルバム『DIG?』をリリースした。その他、ビルはこのところカズミ・ワタナベ、デヴィッド・トーン、ニュー・パーカッション・グループ・オブ・アムステルダム、ジャマラディーン・タクマ、アキラ・イノウエ、アル・ディメオラらのレコーディング／ツアーにも参加している。そして彼の最新プロジェクトがこの《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》というわけだ。

ビル・ブラッフォードは、妻と3人の子供、1匹のカメと一緒に、サリー・ヒルズに住んでいる。

## CURRENT DISCOGRAPHY

Bill Bruford can also be heard on:

Bill Bruford: Masterstrokes	EGLP 67
Bill Bruford's Earthworks: Earthworks	EGED 48
Bill Bruford's Earthworks: DIG?	EGED 60





## RICK WAKEMAN

リック・ウェイクマンがロック・シーンに登場してから20年がたった。1969年7月、デヴィッド・ボウイの伝説的なアルバム『スペース・オディティ』でメロトロンを弾いたのが、彼のデビューだった。

20年の間にはいろいろなことがあった。ストロークスに在籍した1年半、2,000以上のセッションへの参加（マーク・ボラン、ルー・リード、ブラック・サバス、キャット・スティーヴンスなど）、イエスへの2度の加入（1971～74年と1976～79年）、ケン・ラッセル監督の『クリストマニア×クライム・オブ・パッション』をはじめとする10本の映画のサウンドトラック制作、250を上回るビデオ出演、さらに幾度にもわたるソロ・ツアーと24枚のソロ・アルバム。

“ロック界のワイルド・マン”と呼ばれた時代は今や遠い過去のこと、酒も煙草もやめたリックは現在、妻のニーナや子供たちとマン島に住み、“大都会”や“大自然”のプレッシャーに取り巻かれた日常生活を送ることに倦んだ75,000の島民と共に、素朴な生活を楽しんでいる。7つのゴルフ・コースを持つこの島は、熱心なゴルファーのリック（ハンディキャップは15）にとって願ってもない場所なのだ。

個人レッスンとロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージックで15年間クラシックを学んだ彼は、あらゆる類の音楽を好み、多様な音楽を融合させることによって、停滞したポップ界の未来を開けるのではないかと考えた。そして、同様の考えを持つイエスに活動の場を見出し、あとは周知のとおりである。当然のこととして、楽器製造業者には次第に多くが望まれるようになり、こうした動きを先頭に立って引っばっていたリックは、この時期にたくさんのエピソードを残した（好ましいものもあれば妙なものも、無念なものもある）。

彼は堅く信じている、ABWHは彼と仲間のミュージシャンに、かつて4人が果たせないままに終わった“音楽的職務”を遂行するチャンスを与えてくれるだろう、と。

野心と夢に満ちた'90年代の始まりだ。



Seven principles of  
the order of the universe  
All things are differentiated  
apparatus of one infinity  
Everything changes  
All antagonisms are  
complimentary  
There is nothing identical  
What has a front has a back  
The bigger the front  
the bigger the back  
What has a beginning has an end

© George Ohsawa  
Microbiotic Foundation  
1511 Robinson Street  
Orvilleville  
California  
CA95965



## STEVE HOWE

スティーヴ・ハウ個人がミュージシャンとして集めている尊敬には凄まじいものがある。これがスティーヴ、ジョン、ビル、リックの4人となると、それはもう畏敬の念になる。プレイヤーである彼の業績は、曲作りの才能と合わせて見た場合、より顕著である。プレイヤーとしてばかりかジョンを相棒にしたライターとして、スティーヴは常にグループの中心にあって音楽をクリエイトしてきた。本人は“ギタリスト”と呼ばれるのを好むが、イエス、エイジア、GTR、ABWHでの活躍ぶりを見れば、彼がひとつの肩書きで収まるような存在でないことは明らかだ。

彼のルーツは、ブリティッシュ・ロックの大半のプレイヤーと同じく、'50~'60年代初期の音楽にあるが、彼は徐々に多方面に興味を広げた。彼が編み出した流麗でユニークで強烈なロックへのアプローチが、ギターに対する彼の思い入れとこの楽器の秘める無限の可能性をいっそう際立たせている。

グループの中であろうとソロ・プロジェクトであろうと、スティーヴ・ハウがプレイするのは、しばしばロックの主流とはかけ離れた影響力やコンセプト、テクニックから引き出され、独特のテイストとスタイルでそれを拡大していくモダン・ギターなのだ。

スティーヴがゲスト・ギタリストとして関わったアルバムも数多く、最近ではオムニバスLP『ギタースピークス』に参加。また、ポール・サティンというスイスのキーボード・プレイヤーと共に2枚のアルバムを制作し、ソロ新作『TURBULENCE』も完成させている。

《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》への加入により、スティーヴは再びジョンとの曲作りや新たな音楽スタイルの創造、ほかのメンバーを交えてのアレンジ・ワーク、それに友人のロジャー・ディーンと共同で当たる視覚デザインの作業などをエンジョイすることとなった。彼の冒険心はとどまるところを知らない。











## TONY LEVIN

今やトレードマークとなった“スティック・ベース”の名手トニー・レヴィン。音楽界広しといえど、彼ほどの売れっ子ミュージシャンはちょっといない。ジョン・レノン、ピンク・フロイド、ピーター・カブリエル、ポール・サイモン——トニーのセッション・リストはそのままロック界の紳士録になりそう。独創的なアート・ロック・バンド、キング・クリムゾンもまた、彼の見事な技能の恩恵を受けている。トニーは1981～84年までこのバンドに在籍し、ドラマーのビル・ブラッフォードと共に3枚のアルバムとワールド・ツアーに参加した。

ABWH が結成されたとき、そこには足りないパートがひとつだけあった。しかも、適任者はたったひとりしかいなかった。ヴォーカリストのジョン・アンダーソンが言う、「ベース・プレイについて考えた場合、ことにそれがイエスのようなタイプの音楽だった場合、妥協は許されない。トニーの加入は本当に重要な意味を持っていた。エモーションといい音楽観といい、トニーは完璧な人材だったんだ」。

トニー・レヴィンは玄人はだしの写真家でもあり、彼の写真集《ROAD SHOWS》は、音楽ファンにも美術評論家にも称賛されている。

## MILTON MACDONALD

ミルトンがABWHに誘われたのは、グループがパリ郊外のフレット城内にスタジオをしつらえてからまもない1988年11月だった。なぜかといえば、無視するにはあまりにも多くのミュージシャンが、ジョンに彼を推薦したからだ。16年間ギター教育を受け、ロンドンでコンスタントに有名バンドのセッションをこなしていた彼は、このプロジェクトのセカンド・ギタリストとして申し分ないと思われたし、スティーヴのパートナーとしても理想的だったのだ。

ミルトンはミルトンで、自分がレコードを聞く側だったイエスというバンドのほとんどのミュージシャン（それにキング・クリムゾンの半分）と共演する夢がかなって大満足だった。こうして両者がパリで信頼関係を築きあげた結果、ミルトンはライブ・ショーでもレコードと同じ重要な役割を務めることになった。アルバム『閃光』の音楽は非常に複雑な上に、クラシックへの新たなアプローチを試みているため、スピードとテクニックを兼ね備えたこの才能ある若手ギタリストの腕が、ぜひとも必要とされたのである。

ミルトンの自宅はウェスト・ロンドンにあり、妻のアストリッド、幼い娘のテリー・ルイズと3人で暮らしている。

## JULIAN COLBECK

1962年、10歳にしてコンサート・ピアニストになることをあきらめたジュリアン・コルベックは、すぐさまロックン・ロールに宗旨変えした。

彼の最初のバンドは、グリープというおかしな名前で、1973年にカリスマ・レコードと契約したが、さしたる成功も収められずに終わった。彼はその後、ロンドンの《アルバニー・シアター》の音楽監督を務めたり、イギリスのさまざまなツアー・バンドに参加したりしている。

そうしたバンドのひとつにチャーリーがあった。ジュリアンは1977年、アルバム『NO SECOND CHANCE』を制作中のこのバンドに加入し、続く『LINES』『FIGHT DIRTY』『HERE COMES TROUBLE』ではコ・ライター／コ・プロデューサーの役目も引き受けた。

さらに、一時ロサンジェルスで劇場で仕事をしたあと、イギリスへ戻った彼は、ジョン・マイルズ・バンドのキーボーディストとなり、数回にわたる全英／ヨーロッパ・ツアーを行なった。

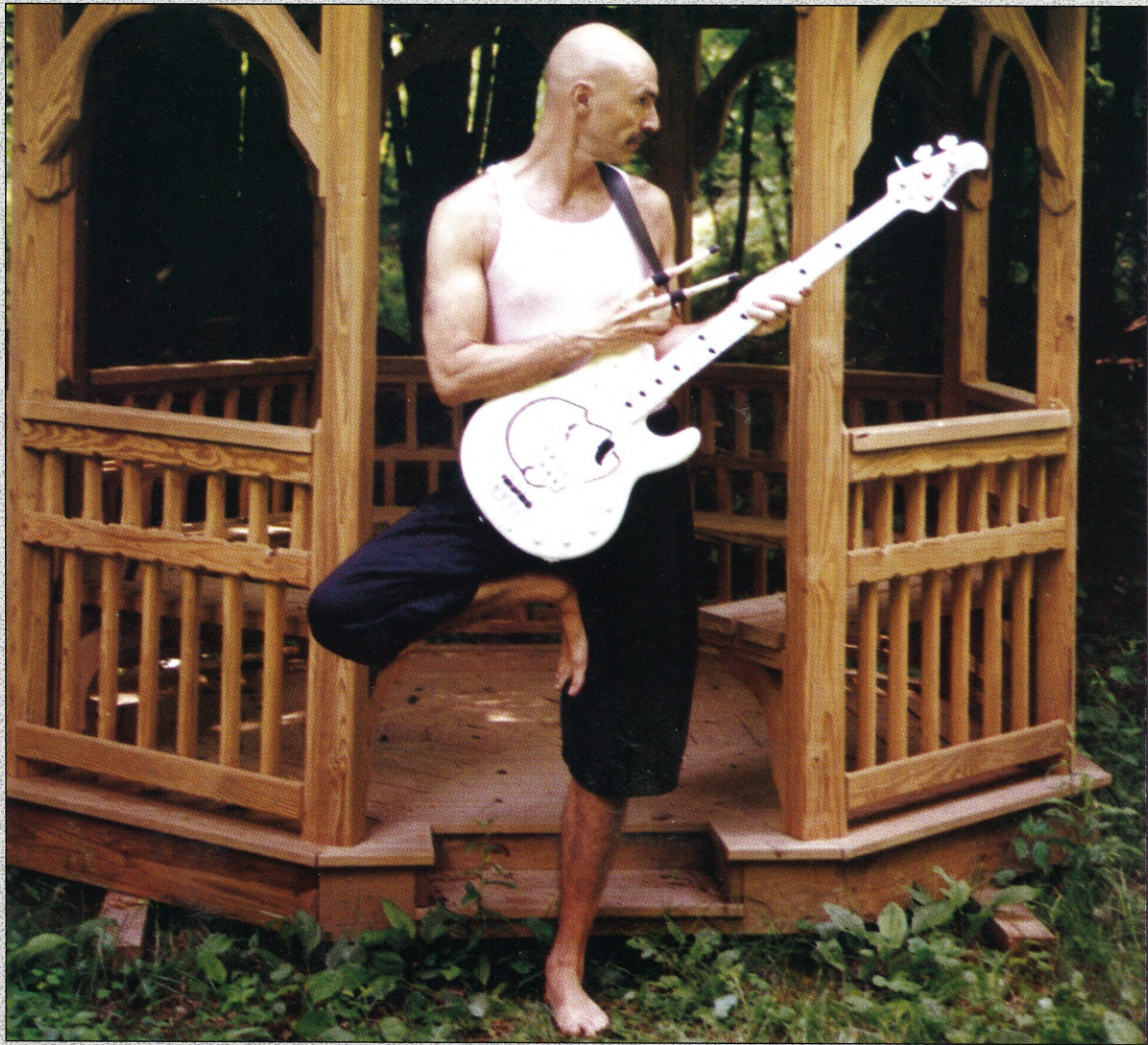
ジュリアンは'80年代半ばから、セッション・ワークのかたわら著述業にも乗り出し、1985年にヴァージンから出版された〈Keyfax〉(シンセサイザー購入のためのガイド・ブック)を手始めに、〈Keyfax 2 & 3〉〈Rockschool〉〈Zappa〉〈How To Make A Hit Record〉(1989年9月出版)などの著作を次々に発表している。

ジュリアンがジョン・アンダーソンの目にとまったのは、最近のアラン・パーソンズとの仕事を通じてだった。音楽界屈指の実績を誇る4人のミュージシャンから、これまでになく野心的なライブ・プロジェクトへの参加を請われたとき、彼が即座に肯定的な返事をしたことは言うまでもない。

ジュリアンの妻は、舞踊家であり写真家のアニー。彼らは生まれたばかりの娘アビゲイルとヘンリーオン・テムズで暮らしている。



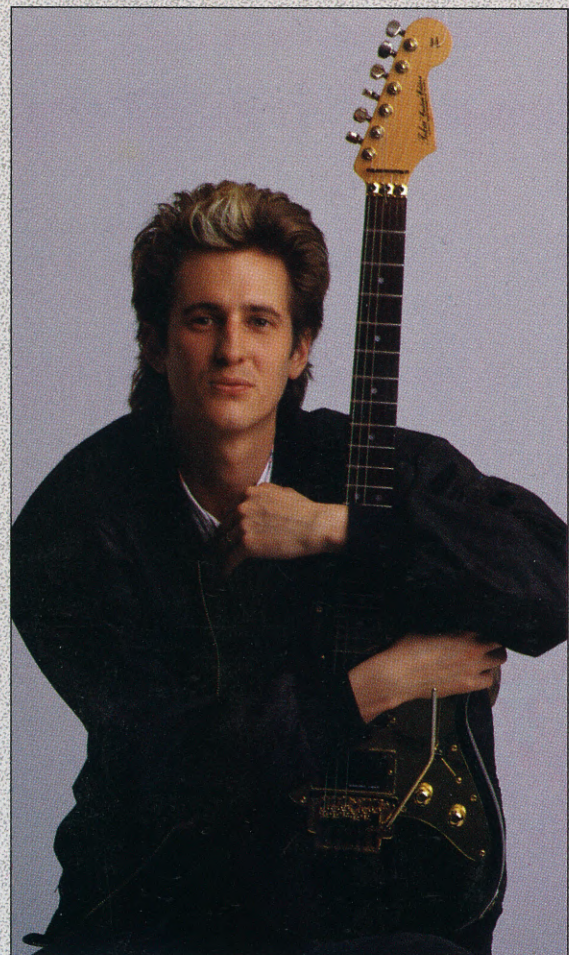




TONY LEVIN



JULIAN COLBECK



MILTON MACDONALD







ARISTO



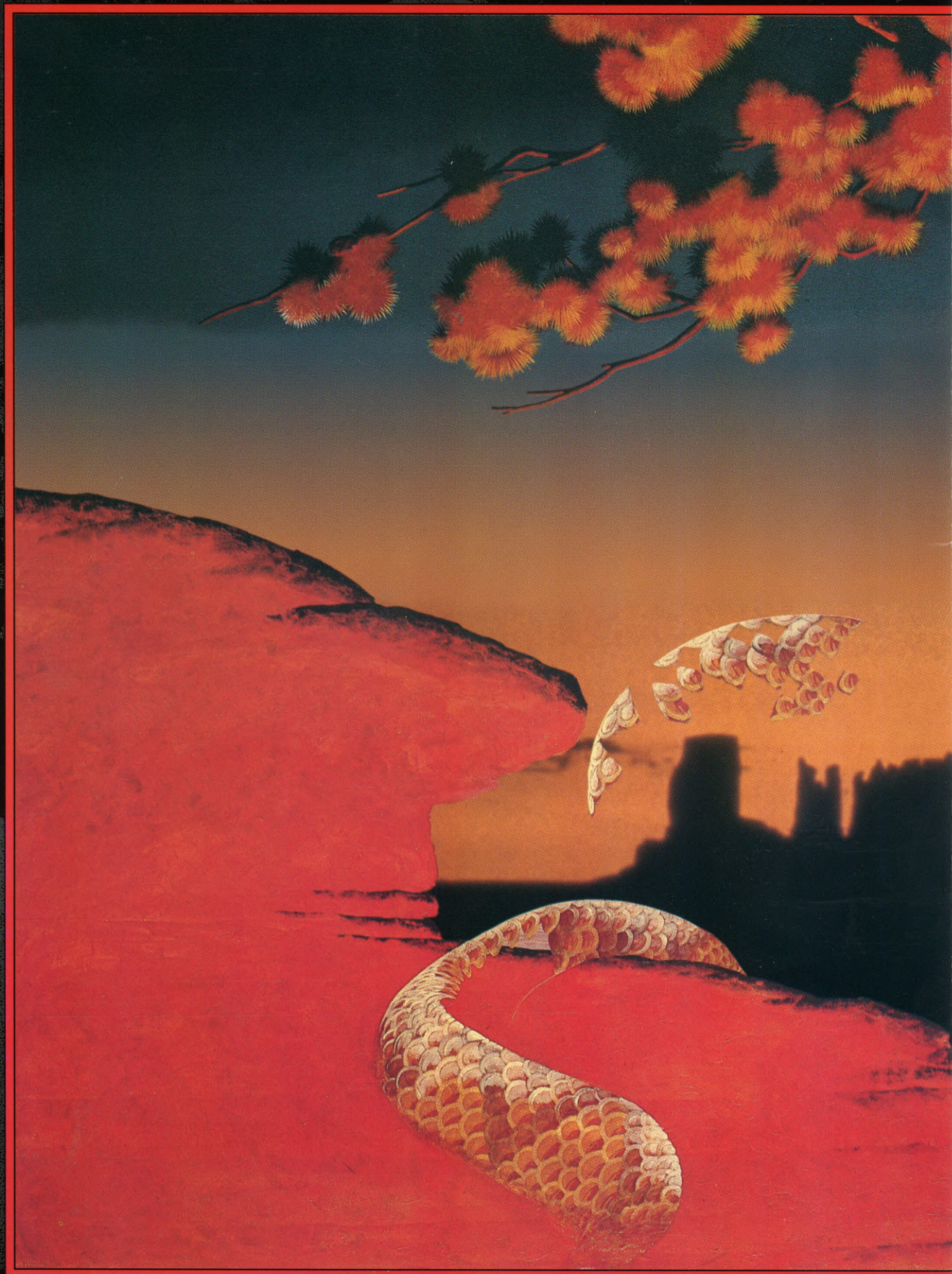


ANDERSON, BRUFORD, WAKEMAN, HOWE  
ALL THE CLASSIC PARTS ARE NOW IN PLACE!

Their masterful debut album includes: "Brother Of Mine", "Order Of The Universe", "Quartet",  
"Birthright" and more.

Mixed by Steve Thompson and Michael Barbiero Produced by Chris Kimsey and Jon Anderson  
© Arista Records, Inc. 1989.





**CONTINENTAL AIRLINES**

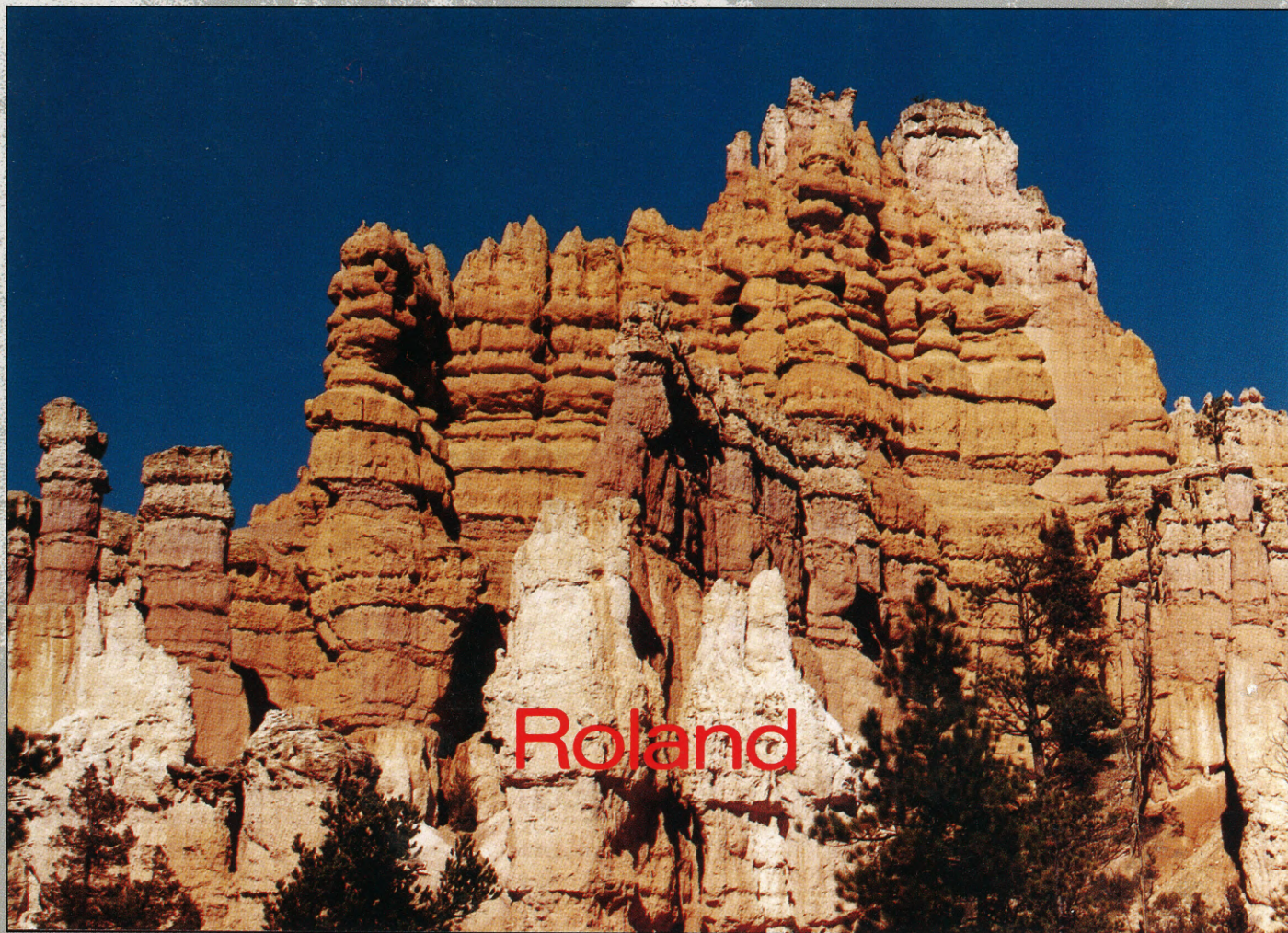




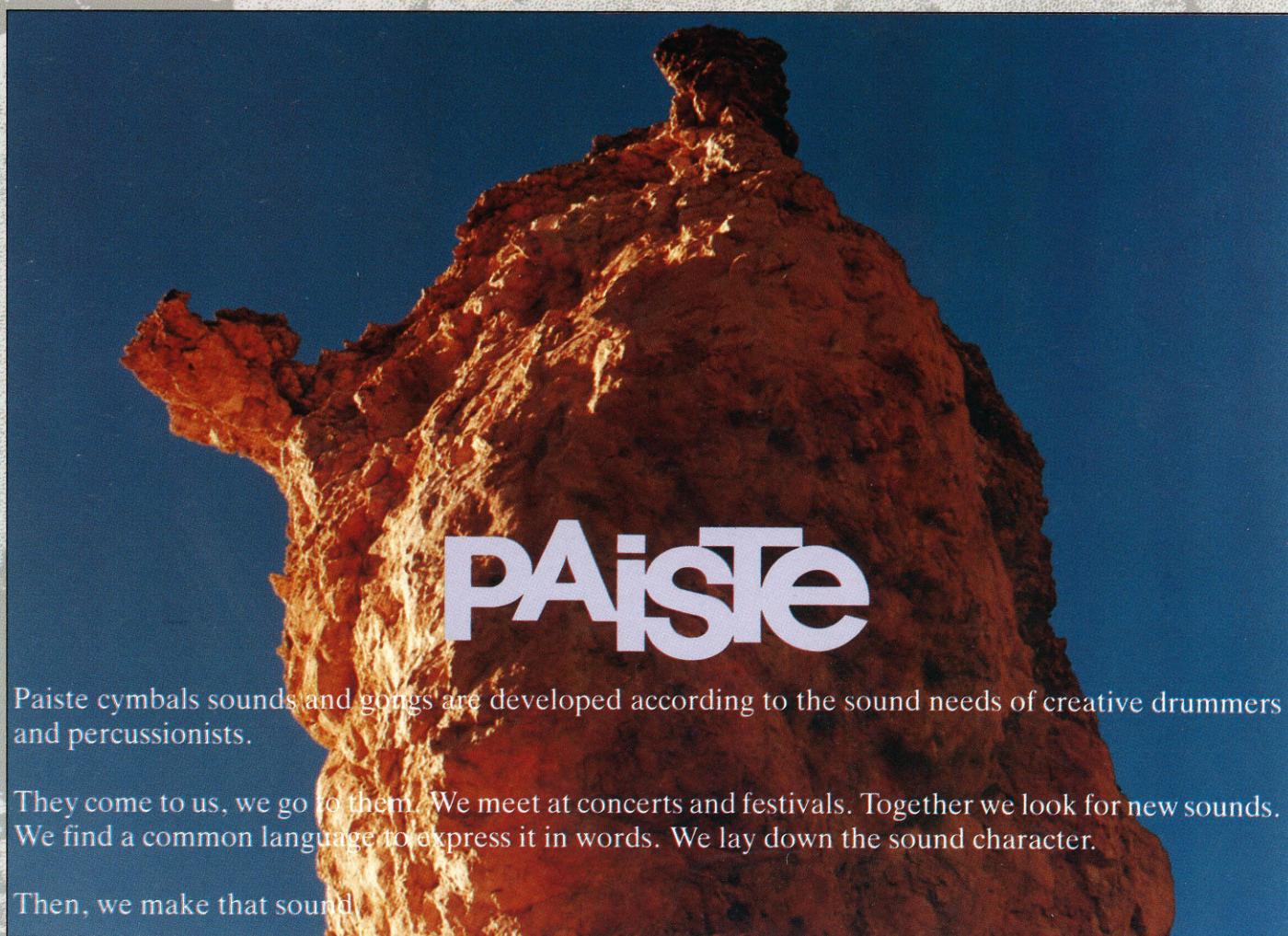
**CONTINENTAL AIRLINES:  
A CLASS ACT TO FLY WITH.**

Let us fly you to our world – over 1500 daily scheduled services to the U.K., Europe, Mexico and the Caribbean, Pacific, Micronesia, Australasia, the Far East and throughout the U.S.A.





Roland



PAiSTE

Paiste cymbals sounds and gongs are developed according to the sound needs of creative drummers and percussionists.

They come to us, we go to them. We meet at concerts and festivals. Together we look for new sounds. We find a common language to express it in words. We lay down the sound character.

Then, we make that sound





**CELESTION**

CELESTION INTERNATIONAL

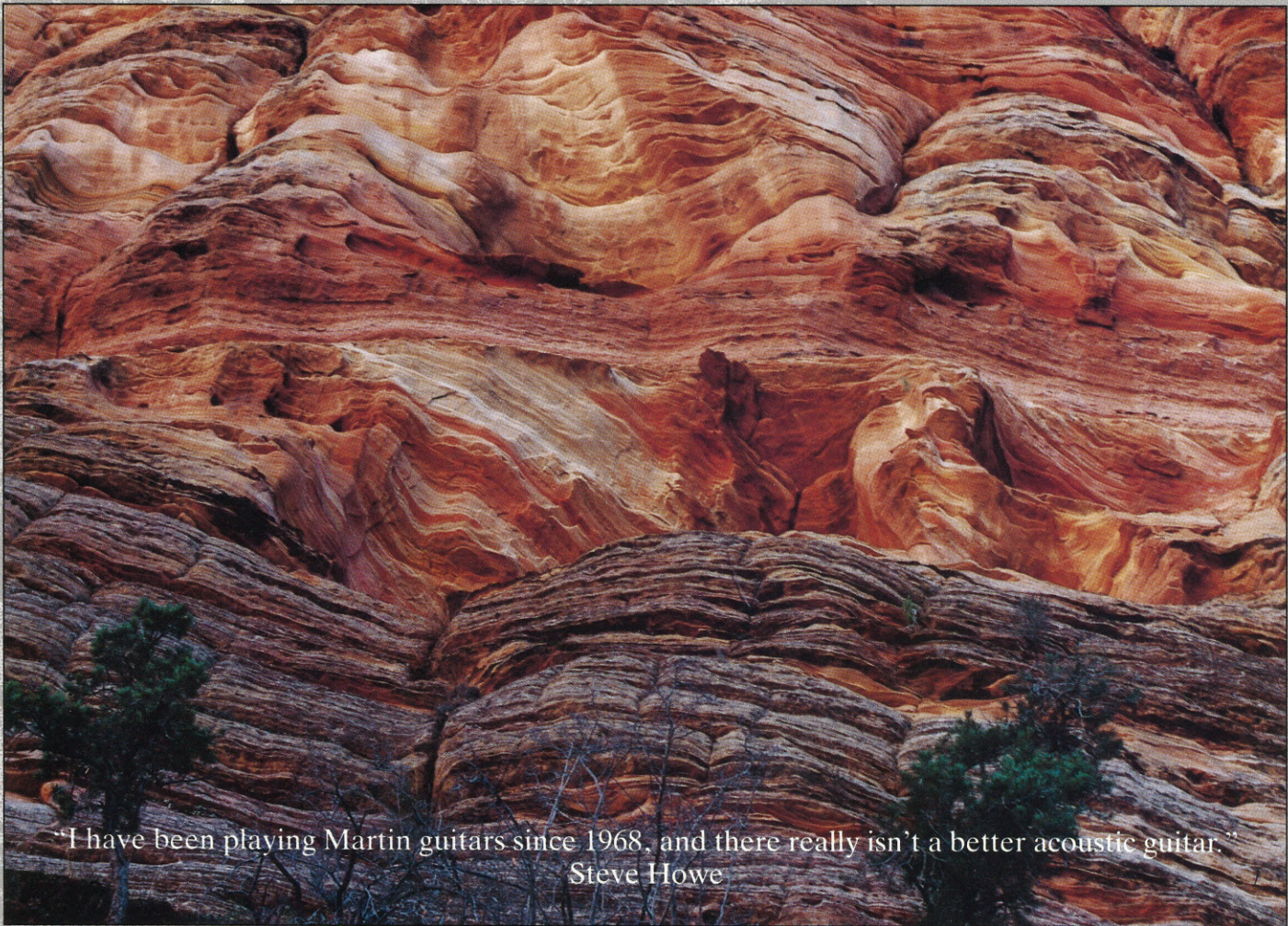
"... For the past 20 years I've been searching for a monitor system that would give me a sound quality at all levels of performance, and for the past 20 years I've had to live with compromise. Embarking on a worldwide tour with Anderson, Bruford, Wakeman and Howe, such a compromise was not a mission I relished. However, whilst trying out new monitor systems prior to rehearsals, I discovered the Celestion SR Series monitor system. I am pleased to announce I have now solved my monitoring problems for the next 20 years. It could probably solve yours too ..."

Rick Wakeman

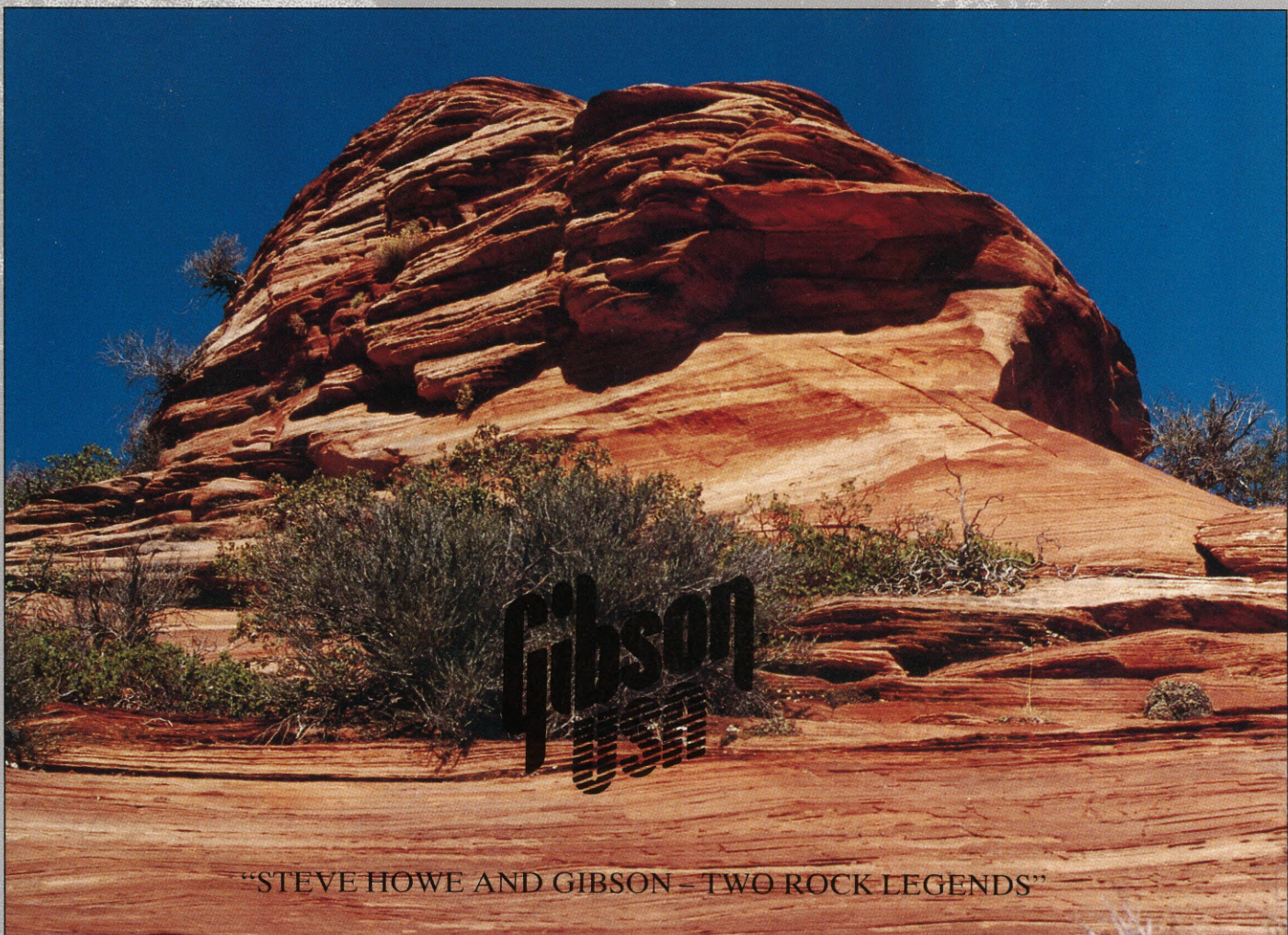
For further information:

Celestion International Ltd  
Foxhall Road  
Ipswich  
Suffolk IP3 8JP  
England  
Tel: (0473) 723131  
Fax: (0473) 729662  
Telex: 98365 DITTON G





"I have been playing Martin guitars since 1968, and there really isn't a better acoustic guitar."  
Steve Howe



Gibson  
USA

"STEVE HOWE AND GIBSON - TWO ROCK LEGENDS"





ANDERSON  
BRUNO  
WALKER  
HOWE  
KORG

Jon Anderson and Rick Wakeman use Korg Musical Instruments.











“Anderson, Bruford, Wakeman, Howe,  
plus YAMAHA—a powerful combination”

**YAMAHA**  
MUSICAL INSTRUMENTS



# 最強のラインナップで復活した 本家本元の香り高き味わい

伊藤秀世

HIDEYO ITOH

今にして思えば、あれは明らかな謎かけではなかったか。ここ数年間にそれぞれ別個にインタビューの機会をもったメンバーたちより凶らずも洩らされた、いくつかの何気ない言葉の断片をつなぎ合わせると、ついそんなこじつけとも戯れてみたくなる。

「別居とか離婚に似ていてね、お互いに対する理解や感謝の気持ちさえ取り戻せば、いつだってまたものさやに収まるものさ」

同じ相手との再婚に、少なくともジョン・アンダーソンは乗り気だった。アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ(以下ABWHと略)の誕生は、そのインタビューからわずか5ヶ月後のことである。いや、もっと具体的な示唆も見て取れた。

「作品自体を簡潔に5分台、4分台へと凝縮できるまでとなったのは、賢さが備わったというか、ある種の成熟だろう。だけどあと2年もすると、昔みたいに演奏時間の長い大作が恋しくなると思うんだ、きつとね」

一方のリック・ウェイクマンは、どこか漠然と新たな方向性を模索しているかにみえた。まるでその答えを再びジョン・アンダーソンとの関係に求めるかのように……。

「何人かのゲスト・ヴォーカリストを交え、自分なりのデジタル・キーボード・サウンドを極めたい。以前はエルトン・ジョンでもチャカ・カーンでも、気軽に電話一本でちよつと歌ってよって声をかけられたけど、今は何でも契約、契約の時代だからね。ぴったりフィットするシンガーが見つかるといいな」

これらのあらゆる潜在意識が目に見えぬ不思議な磁力によってある一点へと強力に引き寄せられたがゆえ、今、こうして彼ら4人が揃ってステージへと飛び出してくる瞬間に、幸運にも立ち合うことができるのだ。

それにしても、書類上の問題からやむなくABWHとの名称に落ち着いたものの、これは紛れもなく歴代最強のラインナップによる一歩進んだ究極のイエス再編にほかならない。かつての気の遠くなるような大作主義の完全復活とまではいかずとも、黄金期の彼らを強く特徴づけた愛すべき大仰な音の立ち振るまいと、特有の鷹揚にしてファンタジックな色彩描写とが、新作『閃光』のそこかしこに溢れる。やはりトレヴァー・ラビンがサウンド面での主導権を握った「ロンリー・ハート」のイエスは、かなり肌触りを異にする、これぞ本家本元の香り高き味わいとでもいおう

か。

久々にハードに切れ込むスティーヴ・ハウの鮮やかなギターさばき。きめ細かな音の装飾を幾重にも縫い上げるリック・ウェイクマンの多彩なキーボード群。そして、たたみかけるコーラス・ワークの狭間をいきいきと跳ね回るジョン・アンダーソンの霞がかかったクリスタル・ヴォイス。ただし、相変わらず極端な変拍子を好むビル・ブラッフォードと急速コンビを組んだ、トニー・レヴィンのあまりにタイトなリズム・キープぶりは、どうしても後期のキング・クリムゾンを連想させ、クリス・スクワイアならではの奔放なほみ出し加減が妙に懐しくも映るが、無い物ねだりをしたところで始まらない。何しろAとBとWとHとが一堂に会してこそ起こり得た、この信じ難い「魔法」を通じて、エイジアやGTR、さらにはジョン&ヴァンゲリスにさえ、往年のイエスの匂いを必死に嗅ぎ取ろうと務めた愚行とも、いよいよお別れなのだから。しかも、「あれだけ小さなCDのケースに、もはや込み入ったデザインなど用をなさない」と語ったジョン・アンダーソンの諦めを見事に覆してみせた、かのロジャー・ディーンの手になる念入りなアート・ワークの美麗さには、秘かなため息すら禁じ得ない。

ローリング・ストーンズとの共同作業をきっかけに名をあげたクリス・キムジーの制作介入も手伝い、今回の『閃光』にあっては、きっちり今日性と娯楽性とが踏まえられた、実にとっつき易い仕上がりようへと話題は集中しがちだ。しかし、ここで特筆すべきは、元来、ガラス細工にも似た繊細さを擁すメンタルな側面ばかりが取り沙汰されてきた彼らの音楽が、打って変わってボディ・アンド・ソウルへと著しく訴えかける、より根源的な人間味へと急速に近づきつつある点に尽きるのではなからうか。聞けば、昨夏よりスタートを切った彼らABWHのワールド・ツアーには、「An Evening Of Yes Music, Plus」との謳い文句が添えられているとのこと。古くからのファンとしては、正直いって、「遙かなる思い出”や”ラウンドアバウト”は、是非とも聴きたい。だが、最も気になってならないのは、むしろ「Plus」の部分、すなわち'90年代へと大いなる第一歩を踏んだ新たなイエス・サウンドが、どのような手順と感触とをもってステージ上にて繰り広げられるのか——それをこの目ではっきりと見届けたいと思う。





光輝く2001年への序曲……

史上最強、天下無敵

——元YESの黄金のラインナップが勢ぞろい!

アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ

NOW ON SALE



無限の広がりを感じさせる壮大な音世界!!

閃光

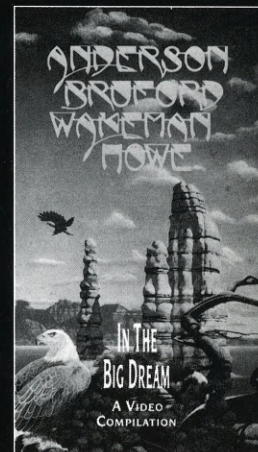
CD A32D-83 税込定価 ¥3,008 (税抜価格 ¥2,920)  
CT A27T-83 税込定価 ¥2,544 (税抜価格 ¥2,470)

来日記念 | アイム・アライブ  
シングル | c/w: レッツ・プリテンド  
CDS A10D-150 税込定価 ¥937 (税抜価格 ¥910)

発売元 BMGビクター株式会社

ANDERSON  
BROFORD  
WAKEMAN  
HOWE

待望の初ビデオ4/4発売!



イエスのあの名盤「こわれもの」に収録されている「燃える朝やけ」の  
11分にわたる熱演(ライブ)とビデオ・クリップ3曲を収録!

イン・ザ・ビッグ・ドリーム

VHS BVVP-4 税込定価 ¥3,300 (税抜価格 ¥3,204)

LD BVLP-4 税込定価 ¥3,300 (税抜価格 ¥3,204)

収録時間: 約35分

いつも新しいレコード会社です

ARISTA BMG  
BMG VICTOR, INC.



